2011.8.18 西日本

ヒーリングタウン おへんろ道編 ささぐり ③

「ご縁」を増やしたい

先達

街ひと物語

弘法大師（空海）が、おへんろさんと常に一緒に歩いてくださるという意味の「同行二人」。その文字を背中に記した白衣を着て、金属の輪を付けた錫杖を持つと、背筋がピンと伸びた。大牟田市吉野の真言宗寺院・吉祥院の僧侶、米田明召さん(82)は、篠栗八十八カ所霊場巡りの「先達」の一人だ。

先達は篠栗おへんろの「ガイド役」。道案内をしたり、札所でのろうそく、線香などの供え方、お経の上げ方などを指導したりする。資格試験はなく、僧侶やベテランおへんろさんが務める。

約35年前にスタートした米田さんの篠栗霊場巡り。そのころの先達は同院住職で夫の源真さん。5月と10月、3泊4日で八十八カ所を一巡した。夫が亡くなると、米田さんが後を務めた。

「厳しいお行だけど、究極の楽しみでもあるのよ」

♣ ♣

当時は列車で篠栗に行った。子ども連れからお年寄りまで総勢約40人。ほかのおへんろさんより1時間も早い午前6時半に宿を出発することもあった。途中、滝行も組み込んでいるからだ。凍える思いをした後、再び歩き始める。荒田高原から若杉山の「奥の院」へ向かう難所では、歩みが苦しい人の腰に紅白の縄を掛けて、男性信者たちが引っ張った。その様子は注目の的だった。

往時を懐かしむ米田さん。現在、行程はバスでの1泊2日に変わり、人数は15人ほどに減った。米田さんは今春、ひざの調子が悪く参加を見送り、初めて先達を知り合いに任せた。「篠栗とのご縁を一人でも多くいただけたらいいのだけど…。いつまで行けるかしら」。不安がよぎる。

かつてに比べ減ったとされる篠栗おへんろ。背景の一つに、先達の高齢化と引退を挙げる向きは多い。

♣ ♣

昨年秋、八十八カ所の札所でつくる「篠栗四国霊場会」は初の試みとして、篠栗町内の旅館関係者や熱心な信者ら26人を「公認先達」に選んだ。篠栗を3回以上巡った経験者で寺院の推薦を受けた候補に、2泊3日で一巡する講習を受けてもらい、本人の意志を確認して任命した。「霊場発展のための新たな仕組み」と同会の印和博会長(65)。先達探しに悩むへんろ客への働き掛けや、八十八カ所巡り初心者の案内に期待がかかる。

北九州市小倉南区のパート従業員、白石千恵美さん(57)は約30年前、今は亡き父母とともに篠栗巡りを始めた。一昨年、母の遺品の供養を44番札所・大宝寺にお願いしてからは毎月1度、同寺に通う。住職から公認先達の募集を聞いたとき、「これもご縁」と引き受けた。

先達になってまだ団体の引率はないが、「親戚や近所の人に声を掛け、まずは1回お参りしたい」と考えている。

上 大牟田市の吉祥院の僧侶でベテラン先達の米田明召さん 下 「公認先達」の認定書を手にする白石千恵美さん

篠栗四国霊場会

八十八カ所の札所を管理する寺院の住職や地元の守堂者（堂守さん）でつくる団体。札所の管理者の交代などについて、年1回の総会で決議する。霊場のPR活動も行っており、特に今年は9月17～19日、知多（愛知県）、小豆島（香川県）の霊場会とともに、福岡市博多区の博多スターレーンで「お砂踏み」を開く。各札所の境内の砂を踏みながらお参りを体験してもらう。